

## 第5回 新玉津島神社と俊成社

### 新玉津島神社

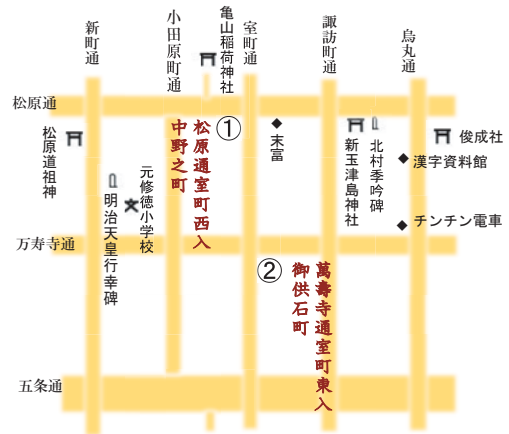
松原室町の十字路の西南かどに、仁丹の町名看板「松原通室町西入中野之町」があります。今回は、「ここを出発点にしましょう」。



まつばらどおりむろまぢにしいる なかののちやう  
松原通 室町西入 中野之町 ①

第2回と同じく、今回もまず和菓子から。松原室町の四辻を東にはいったところに、老舗の和菓子屋「末富」(松原通室町東入ル玉津島町)があります。創業は、明治二六年(一八九三年)。上生菓子や干菓子のほかに、「野菜煎餅」(玉子煎餅に蓮根や木の芽などを薄くして焼き込んだもの)や「うすべに」(薄い麸焼きの間に、ほんのり甘い梅肉を挟んだもの)が名物。

末富主人の山口富蔵さんの話(朝日新聞京都総局・朝日京都会「語る」シリーズ第十回)によると、上生菓子には銘がついており、この銘を考えることがきわめて重要だといっています。上生菓子



仁丹町名看板の所在(室町通の松原から五条まで)

の銘は、季節感をだすための仕掛けで、古歌などを踏まえることが多く、たとえば、初夏のころには、山吹をイメージした黄色の菓자에、銘「玉川」と付けるといような具合です。この銘は、山吹の名所として歌枕になっている「井出の玉川」を踏まえたもので、次に示す藤原俊成の歌によっているとのこと。

皇太后宮大夫俊成

駒とめてなを水かはん山吹の

はなの露そふ井手の玉川

新古今和歌集巻第二・春歌下・一五九

この和歌の主藤原俊成は、店の所在地の玉津島町にふさわしい。というのは、玉津島町の由来となった新玉津島神社（松原通烏丸西入ル玉津島町）は、つい鼻の先。この社は、藤原俊成が紀州和歌山の玉津嶋神社の祭神衣通姫尊（「そとおしひめ」ともいう）を勧請したものといわれています。現在の社殿は、狭い参道をはいつた場所に、西向きに建っています。ビルと駐車場の間の窮屈な地所に閉じ込められていることが、社殿全景を写せないので苦労して撮った写真からおわかりでしょう。

本シリーズ第2回で、住吉神社と人丸神社について触れましたが、これで、俊成が勧請したといわれる和歌三神がすべて揃ったわけです。

藤原俊成が、新玉津島神社としてわざわざ分祀した玉津島神社。その祭神の衣通姫にまつわる話を、いろいろと集めてみましょう。虚実ないませた伝承ですが、おもわぬ方向に話が進みます。

### 衣通姫、玉津島神社の祭神となる

紀州の玉津島神社（和歌山県和歌山市和歌浦）とは、歌枕として名高い和歌の浦に鎮座する神社で、祭神は、稚日女尊（玉津島姫）、息長足姫尊（神功皇后）、および衣通姫尊。『日本書紀』によると、衣通姫は、允恭天皇の側室。衣から美しさが透き通るような美人であったといい、允恭天皇の皇子軽皇子との恋が伝えられています。衣通姫が神格化され、もともとの玉津島姫と同一視さ



新玉津島神社の社殿

れて、和歌の神として祀られるようになりました。

紀州の玉津島神社の由来によると、病気の光孝天皇（天皇在位、八八四〜八八七。仁和の帝、小松の帝とも呼ばれる）の夢に、衣通姫があらわれて、

たちかえりまたも此の世に跡たれむ

名もおもしろき和歌の浦波

と詠んだので、仁和三年（八八七年）に勅命により衣通姫を玉津

島神社に合祀したと伝えます。光孝天皇の勅願所として、住吉神社、人丸神社とともに和歌三神と並び称されていることは、すでに第2回で紹介したとおりです。この玉津島神社の由来を信ずるとすれば、玉津島神社が和歌三神の一柱なっただけは、光孝天皇の勅願所となった八八〇年代以降であると推測されます。

ここで、寄り道。光孝天皇は、五十五歳で即位。即位まで、ただの皇子としてすごしました。その延長で、自らまさなご（ここでは、料理）をしたことが徒然草第一七六段に記載されています。

黒戸は、小松御門位につかせ給ひて、昔ただ人におは  
 しましし時、まさな事させ給ひしを忘れ給はで、常に嘗  
 ませ給ひける間なり。御新にすすけたれば、黒戸といふ  
 とぞ。

『方丈記徒然草』岩波古典文学大系 西尾實校注（一九五七）  
 ただし、振りがな、送りがなを変更したところがある。

一方で、歌人としてすぐれており、たとえば、

仁和のみかどみこにおましましける時に、人にわかなたま

ひける御うた

君がため春の野に出でて若菜つむ

わが衣手に雪はふりつつ

古今和歌集巻第一・春歌上・二二

この歌は、百人一首に採られているので、「存じのとおり。自ら料理をしたということをおもいおすかどうかで、この歌の含蓄も変わってくる気がいたします。仁和の元号でもいじりました

が、御室仁和寺は、光孝天皇が仁和二年（八八六年）に着工した。完成をみずに逝去したあと、仁和四年その子の宇多天皇が完成させました。この宇多天皇のブレインが菅原道真や紀長谷雄で、第2回や第4回の話につながるわけで、寄り道をした所以です。

玉津島神社は、和歌の浦にあることから、和歌の（浦の）神。当初は、どちらかというと語呂合わせから、和歌の神といわれるようになったでしょう。それに、「実」を与えるために、和歌に秀でているという伝承のあった衣通姫を合祀したのではないでしょうが。この伝承は、紀貫之が『古今和歌集』仮名序で衣通姫を取り上げていることから、『古今和歌集』を編纂したとき（九〇五年）には、すでに一般的になっていたと考えられます。このことは、光孝天皇の勅願所云々（八八〇年代）とも合致します。

### 本居宣長の玉勝間では、祭神は神功皇后？

玉津島神社の祭神についての考察が、本居宣長（一七三〇～一八〇一）の『玉勝間』九の巻・二二（『本居宣長』、吉川幸次郎、佐竹照広、日野龍夫校注、日本思想体系四〇、岩波書店、一九七八）にあります。その結論は、玉津島神社の祭神は神功皇后であるというもの（『今按名蹟考』「岩橋秀栄」の説を引用するという形ですが）。

いわく、「玉津島神社を和歌の神とするのは、和歌の浦にあるからであって、祭神が神功皇后であるのと矛盾しない（私見ですが、これは、祭神がだれであってもよいことですね）。稚日女尊

を祭神とするのは、和歌の浦との語呂合わせにすぎない（玉津島神社を和歌の神とするのは、和歌の浦の語呂合わせにすぎないのではないかしら？ これは、わたしめの茶々）。住吉神社は四座であるが、もとは三座で、第四座は津守国基が、玉津島明神、即ち衣通姫をのちに加えたものというが、これは俗説。第四社として加えたのは、玉津島神功皇后であって、和歌の神とするのに衣通姫をもつてくる必要はない。第四社の祭神を、衣通姫であるというのは世間の妄説で誤っている。玉津島（津）は「つ」と濁る（は、玉出島であり、神功皇后が新羅出兵の折、玉を得た地であること）によって名づけられたものである。「岩橋秀栄の説を引いたとして、ざっと、このようなことを論じております。あくまで引用という形をとっているの、言長がこの説に賛同しているのかどうかは、文面だけからはつきりしないのですが、長々を引用しているからには、賛同しているとして取り扱っておきましよう。

住吉大社第四社の祭神は、現在、神功皇后となっているので、そこだけを取り出すと、玉勝間所載の説は説得力があるようにみえます。多分、津守国基が住吉神社に第四社を加えたときに考えたことと同じだと、わたしはそうにらんでいます。つまり、表向きは、第四社の祭神を神功皇后とし、「玉津島姫＝神功皇后だから、玉津島姫を祀ったことになり、住吉神社は、和歌の神である」と、津守国基はいいたかったのでしよう。玉勝間所載の説は、津守国基が住吉神社を和歌の神にするために弄した（と推定される）術中にはまっていますね。

時系列でいえば、「玉津島神社の社伝」↓住吉神社第四社の社

伝」であるのに、玉勝間所載の説は、逆転させて「住吉神社第四社の社伝」↓玉津島神社の社伝」という論理ですから、形式的にいつてもおかしい。玉津島神社の社伝では、稚日女尊がもともと祭神で、神功皇后はあとから祀ったとありますから、玉勝間所載の説は社伝を無視しており強引です。

さらにしつこいことを承知で付け加えると、玉津島明神（稚日女尊・神功皇后・衣通姫）＝（稚日女尊・衣通姫）＝玉津島明神（神功皇后）の引き算で残った玉津島明神（神功皇后）が和歌の神を代表できるかという問題です。むしろ、玉津島明神（稚日女尊・衣通姫）のほうが、和歌の神を代表していますね。素直に考えれば、こんな引き算をせずに、住吉大社第四座の祭神を神功皇后でなく、玉津島姫（稚日女尊・神功皇后・衣通姫）とすればよかったとおもいますが、なぜそうしなかったのでしょうか？ 大きな疑問として残ります。

### 再び、和歌三神——ちよつとした思考実験

『都名所図会』には、新玉津島神社の境内の鳥瞰図が載っています。現在の狭い境内とは、比べものにならないくらい広い境内で、おそらくは住吉明神にちなんだ「住吉松」が描かれています。次の和歌に示されるように、住吉明神といえは松がつきもの。

題しらす

よみ人しらす

住吉の岸のひめ松人ならば

いく世か経しとはましものを

古今和歌集卷第十七・雑歌上・九〇六

惠慶法師

我とはば神代のこともこたへなむ

むかしをしれる住吉の松

拾遺和歌集卷第十・神楽歌・五九〇

『都名所図会』が刊行された江戸時代には、和歌三神は定着していたと考えられますので、新玉津島神社の境内の「住吉松」は、あきらかに和歌三神を意識しています。

和歌三神の話に戻ったところで、もう一度、どっぷりと無駄話。繰り返しのところもありますが、与太話ゆえ、ご容赦のほど。第2回で山部赤人を住吉明神の代わりに加えて、人丸明神、赤人明神、玉津島明神を新和歌三神とする案をでっちあげました。この案だと人丸明神―明石の浦、赤人明神―和歌の浦、玉津島明神―和歌の浦となつて、和歌の浦が二重になります。これでは、さすがに具合がわるいので、第2回でも、いろいろと御託を並べました。

今回はさらに腰をすえて、山部赤人を衣通姫の代わりに和歌三神とすることを吟味しましょう。つまり、人丸明神、住吉明神、赤人明神という案です。万葉集にある「瀧を無み」の歌は、山部赤人が和歌の浦を詠ったものですから、候補者としては最有力だと思われまます。こつすれば、人丸明神―明石の浦、住吉明神―住之江の浦、赤人明神―和歌の浦というように対応して、実に具合がよい。しかしながら、この案だと、第2回で述べたように、あらたに赤人神社を創建しなければならない。なぜなら、男性である山部赤人を、女系の祭神である玉津島神社に合祀することは

ばかられるからです。

玉津島明神は、もともと和歌の浦にあったと考えられますので、和歌の浦が和歌の浦の語呂合わせであったとしても(むしろ、そつであったからこそ)、はずす訳にはゆかない。そこで、女性という理由で、衣通姫を合祀することにしたのではないか。「名」は語呂あわせで、「実」は『古今集』に歌の載っている衣通姫の合祀で、名実ともに整えたということ。このように、馬鹿馬鹿しいとおもえても、あえて思考実験をおこなうと、事態がはっきりすることもあります。赤人さんも残念なことでごさいます。

和歌三神について、パラノイアのごとく、ごちゃごちゃと御託を並べてきましたので、ここで整理をいたしましょう。理科系の思考パターンからいいますと、和歌三神を考えることは、神社―景勝の浦―祭神(歌人)の組み合わせを考えるという問題に帰着します。この際、神社―景勝の浦を固定するという前提条件を付けます。つまり、人丸(柿本)神社―明石の浦、住吉神社―住之江の浦、玉津島神社―和歌の浦は固定です。さらに、人丸(柿本)神社―明石の浦、柿本人麻呂、玉津島神社―和歌の浦―衣通姫の組み合わせは異論のないものとして、従来の組み合わせを踏襲することにします。問題は、住吉神社―住之江の浦に組み合わせる祭神(歌人)です。津守国基が、衣通姫(⇕玉津島姫)⇕神功皇后という図式)を合祀するという、一見苦し紛れとみえるがよく考えたやり方で(ちょっと失礼かな)、住吉明神を和歌の神に仕立てたことは、第2回で述べ、今回でもしつこく説明したとおりです。



御身は衣通姫の流りゅうなれば、あはれむ歌にて強からねば、古歌を盗むは道理なり。

これは、『古今和歌集』の仮名序を踏まえたもの。小町は、黒主が証拠に出した草子をみて、墨の色が違うことを見抜き、草子を洗つことを求めます。すると、黒主が書き込んだところが、水に流れて消えてしまいます。

ありがたや、出雲住吉玉津島丸赤人の御恵みかと伏し拝み、喜びて龍顔にさし上げたりや。

ここには、和歌の神がずらずらと列挙されており、「龍顔」とは、「天皇の目前に」というほどの意味。そして、天皇のとりなしにより、小町と黒主が和解するという筋書になっております。『草子洗小町』では、大伴黒主（生没年不詳、六歌仙の一人）は、損な役回りになっていますが、『後撰和歌集』に玉津島を詠い込んだ和歌が残っています。

玉津島ふかき入り江をこぐ舟の

うきたる恋もわれはするかな

後撰和歌集卷第十一・恋歌三・七六八

## 衣通姫と関寺小町

能の『関寺小町』は、百歳の小野小町が昔をしのび落魄を歎く話です。昔をしのぶ場面のかなりの部分は、『古今和歌集』の仮

名序を典拠としています。まず、ワキの関寺の僧が、「わが背子の歌（仮名序。第2回で紹介）の作者を問うと、シテの老女（実は、落魄した小野小町）は、「衣通姫の歌だ」と正しく答えます。その問答のあと、僧は、「近年聞こえたる小野の小町こそ、衣通姫の流りゅうとは承うけりたれ」と前置きして、小野小町の歌を紹介します。老女は次第に顔を伏せながら聞いておりましたが、顔を上げて、この歌を詠んだ事情を説明いたします。

文屋のやすひでが三河の掾そとに成りて、あがた見にはえいで  
立たじやといひやれりける返事によめる 小野小町

侘ぬれば身を浮草の根をたえて

さそふ水あらばいなんとぞ思ふ

古今和歌集卷第十八・雑歌下・九三八  
老女が小町の果はであることを悟った僧は、七夕の手向けの遊びに誘います。童女の舞に誘われて、小町も舞つというあらずじ。この歌は、小野小町の代表的な歌として、『古今和歌集』の仮名序にも引用されています。

## 文芸作品の中の衣通姫

最近、インターネットが便利になって、著作権の切れた文芸作品が、「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>)からデジタルデータとして入手できるようになりました。さらには、検索エンジン「青空館」(<http://nishinari.or.jp/namazun.cgi>)によつて、全文検索ができるようになったので、文芸作品の中から「衣通姫

をふくむもの」を検索するというような芸当も軽々とできるようになりまして。ありがたい世の中になったもので、ここまで築き上げたボランティアの皆様には感謝します。そこで、実際に検索をやってみましたので、その結果を手短かに述べることにいたします。

樋口一葉『十三夜』から、主人公の幼馴染の述懐、車夫となった顛末を引用してみましよう。

人は顔の好い女房を持たせたら足が止まるか、子が生れたら氣が改まるかとも思ふて居たのであらうなれど、たとへ小町と西施と手を引いて来て、衣通姫が舞を舞つて見せて呉れても私の放蕩は直らぬ事に極めて置いたを、何で乳くさい子供顔見て發心が出来ませう、遊んで遊んで遊び抜いて、呑んで呑んで呑み盡して、家も稼業もそつち除けに箸一本もたぬやうに成つたは一昨々年、お袋は田舎へ嫁入つた姉の處に引取つて貰ひまするし、女房は子をつけて賣家へ戻したまゝ音信不通、(後略)

樋口一葉『十三夜』(青空文庫より引用)  
小町、西施、衣通姫とくれば、美人のオンパレード。西施は中国の美人、松尾芭蕉の『おくの細道』にもでてまいります。

松島は笑ふがごとく、象潟はつらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

松尾芭蕉『おくの細道』萩原恭男校注

(ワイド版岩波文庫、一九九一)  
わたしなら、小町と西施が手を引いてくれば、きつと妥協してしまいます。衣通姫が舞を舞つて見せてくれたら、それこそメロメロになるでしょう。ところで、「呑んで呑んで呑み盡して」のところは、河島英伍の歌「酒と泪と男と女」を思い出しますね。何度かカラオケで挑戦しましたが、このサビの部分が高音なので、たいがい音はずしてしまいます。

岡本綺堂の伝奇小説『玉藻の前』にも、衣通姫がでてきます。安倍泰親(安倍晴明の子孫)と玉藻の前(狐の化身)との祈禱合戦の場面。今回のおでましは、光明皇后と衣通姫。

玉藻はその無智をあざけるように、唇に薄い笑みをうかべた。「播磨守殿ともあるべきお人が、それほどのことを御存じないか。そのむかしの光明皇后、衣通姫、これらの尊き人びとを、お身は人間にあらずと見らるるか。但しは魔性の者と申さるるか」これらの人びとは現実に不思議を見せたのではないと泰親は言った。「前者はその徳の輝きを仰いで光明と申したのである。後者はその肌の清らかなのを形容して衣通と呼んだのである。いかなる尊い人間でも、身の内から光りを放つて夜を昼にするなどというためしのあるべき筈がない。もしこの世にそのような人間があるとすれば、それは仏陀の権化か、但しは妖魔の化生である」と、彼は鋭く言い切った。

岡本綺堂『玉藻の前』(青空文庫より引用)

与謝野晶子の詩にも衣通姫が詠われています。題が、「衣通姫」



になつていて、伝承を踏まえて、「衣を通して」と詠っています。

衣通姫（今井鑷子女の新舞踊のために作る。）

（前略）

心うれしく躍るなり、

身に余りたる我が恋は

君知らしめせ、忍びかね、

衣きぬを通して光るとも。

（後略）

與謝野晶子『晶子詩篇全集拾遺』（青空文庫より引用）

ちなみに、この詩は、昭和七年（一九三二年）の作です。文芸作品を通して眺めると、衣通姫は時代を超えた、「超」美人ですね。

### 北村季吟先生遺蹟の碑

本家の玉津島神社とその祭神衣通姫について、長々を話してきましたので、このあたりでそろそろ、新玉津島神社に戻りましょう。次に示す写真は、新玉津島神社を松原通から撮ったものです。左側（東側）の駐車場の奥に、社殿の北側側面が見えます。鳥居の左脇には、「北村季吟先生遺蹟」の碑が建っています。

北村季吟（一六二四～一七〇五）は、新玉津島神社の社司として一時期（一六八二～一六八九）を過ごしたのち、江戸幕府の歌学方になりました。季吟は、多くの古典の注釈書を刊行しており、古典を一般に普及させたという意味で、きわめて重要な業績をあげています。ざっと書きあげると、『大和物語抄』（一六五



新玉津島神社（社殿の北側側面が駐車場奥にみえる）と北村季吟先生遺蹟の碑（鳥居の向かって左脇）

三、承応二年）、『土佐日記抄』（一六六一、寛文元年）、『徒然草文段抄』（一六六七年、寛文七年）、源氏物語の注釈書『湖月抄』（一六七三年、延宝元年）、枕草子の注釈書『春曙抄』（一六七四年、延宝二年）、『伊勢物語拾穂抄』（一六八〇、延宝八年）、『万葉拾穂抄』（一六八六、貞享三年）など。列挙するとわかるように、一人で完成したとは思えないくらい多数で、その精力的な活動には脱帽いたします。

主筋の藤堂蝉吟が北村季吟の弟子であった関係から、松尾芭蕉（一六四四～一六九八）も季吟に師事。一六七四年（延宝二年）に季吟より、連歌俳諧の秘伝書『埋木』の伝授を受け、しばらくして、江戸にて俳諧宗匠として独立したと伝えられています。

### 新玉津島神社の再興

『拾遺都名所図会』巻一には、「和歌所」という項が設けてあって、新玉津島神社の由来を補足しています。これは、北村季吟が新玉津島神社の社司をしていたときに書いた『社記』の抜粋です。それによれば、藤原俊成の屋敷が五条室町のあたりにあったというのは『徹書記の物語』に出ており、この地に、室町幕府初代の足利尊氏（等持院殿、一三〇六～一三五八）が霊夢によって、新玉津島神社を再興したと、堯憲（堯孝の弟子、堯孝は堯尋の子）の『深秘抄』にあるそうです。この話を裏付ける話として、第三代足利義満（鹿苑院殿、一三五八～一四〇八）と別当職にあった堯尋の贈答歌があると、『深秘抄』は伝えていきます。

権大僧都堯尋

我までは三代につかへて玉津島

かひある神のひかりをぞ見る

鹿苑院殿御返し

われもまた三代人もみよりて馴れ来つつ

ともにぞみがく玉津島姫

二条派の歌学を受け継いで来た頼阿・経賢・堯尋の三代、室町幕府の尊氏・義詮・義満の三代が、相携えて、新玉津島神社を盛り立ててきたと詠っています。

五条室町の地は、二条為明が手に入れ、貞治二年（一三三二年）に『新拾遺和歌集』（一三六四年成立、二条為明・頼阿の撰）勅撰の命が下ったときに、和歌所としたことが伝えられています（『拾芥抄』）。この撰進は、室町幕府第二代足利義詮（宝筐院殿、一三三〇～一三六七）の執奏によるもので、完成後貞治六年（一三六六年）には、新玉津島神社の歌合を催行しています。この歌合の際に、新玉津島神社の再興を示唆した歌が詠まれていることが、『拾遺都名所図会』の引用からわかります。

残念ながら、正徹の『徹書記物語』、堯憲の『和歌深秘抄』、洞院公賢（伝）『拾芥抄』については、もとの記載を参照できなかったため、上記は『拾遺都名所図会』の「和歌所」の記載の受け売りです。この記載を踏まえると、二条為明が和歌所を屋敷内に開いたときに、等持院殿の霊夢云々を持ち出して、足利義詮と相計り、新玉津島神社を再興したのではないかと考えられます。

『拾遺都名所図会』には、季吟が六十歳のときに新玉津島神社に住み始めるというので詠んだ歌として、次の歌が『社記』から

引用されています。

おもはずよ六十じの春の老の波  
 玉津島ねに身をよせんとは

季吟

この歌からは、新玉津島神社の社司になったことを契機に、さてもう一仕事と、仕切りなおしをした季吟の姿がおもい浮かびます。ついでに申せば、「六十路」と聞くと、わが身に引き寄せて考え込んでしまいます。年齢六十にもなりますと体力が衰えが目に見えてきますので、なにか目先のことが変わったのかこつけて、気力だけでも奮い立たせようという気持になるものです。

### 本居宣長と新玉津島神社

北村季吟の死後は、弟子の森河章尹（一六七〇～一七六二）が、新玉津島神社の社司を継いでいます。森河章尹の最晩年に、一期、本居宣長が師事しています（師事というほどかたくなるしくないかもしれませんが）。

本居宣長は、若いころ、堀景山（一六八八～一七五七）などに師事して、儒学・医学を修めておりました。寄寓していた堀景山宅の跡に「本居宣長先生修学之地」の碑（室町通綾小路西入善長寺町）が建てられています。宣長の『在京日記』（<http://www.noringakinenkan.com/nenpu/>）によれば、そのかたわら、宝暦二年十月十三日（一七五二年十一月十八日）から新玉津島神社の和歌月次会に参加するようになり、宝暦三年六月十三日（一七五

三年七月十三日）まで、毎月十三日に開催される会に、病欠はあるものも出席しています。堀景山宅と新玉津島神社がごく近いので、気軽に参加したというところでしょうか。もしかしたら、新玉津島神社が知的な「和歌サロン」というような役割をはたしていたのかもしれない。これは、勝手な想像です。

### 龜山稻荷神社

ここで、松原通を町名看板①よりも西へ戻って、龜山稻荷神社（松原通室町西入北側中野之町）を訪ねましょう。この神社は、龜山藩（龜岡藩）京都松原邸の鎮守であった白滝大明神と花月大明神とを合祀した神社です。

今は、ビルの谷間の路地に赤い鳥居が並んでいるのが目を引きます。写真で見るとおり、文字どおりビルの谷間で、異次元にもぐりこむ入口のような風情。京都ならではの情景です。鳥居をくぐって路地の奥にはいるとすこし広くなって、成徳中学校（今年から下京中学校に併合廃校になりましたので元の成徳中学校）の南側の塀を背にして、龜山稻荷の社が建っています。右脇に両祭神の名を刻んだ石碑が建っていることが、写真でわかります。

龜山稻荷神社への入口、松原通に面して、「丹波国龜山藩京屋敷跡」の石碑があります。駒札によれば、江戸時代に、龜山藩松平氏は譜代大名として、京都火消役として重責を果たしていました。

亀山稻荷神社の社殿



亀山稻荷神社の門前と丹波国亀山藩京屋敷跡の碑



## 俊成社

烏丸通松原下ル東側俊成町としなりのやしろに俊成社しゅんせいがあります。藤原俊成の邸宅跡に、のちの人が俊成の霊を祭ったといわれています。ピジネス街の一角にあるこじんまりしたお社です。ただし、藤原俊成の五条第址がこのあたりという史料はないらしい。町名の俊成町は、後世、伝承をもとに付けたものと推測されます。確実なのは、五条京極第で、息子の藤原定家の『明月記』に、左京五条四坊十三町（今の寺町通、麩屋町、高辻通、松原通で囲まれた一角）にあつたことが記載されています。ここでは、俊成社の伝承を尊重して、俊成町のあたりに邸宅があつたとしておきましょう。

『都名所図会』巻二には、俊成卿しゅんせいの社やしろとして、「松原通烏丸かたすまの南、人家じんかの後にあり。祭まつる所五條三位俊成卿しゅんせいの霊れいなり。かの卿きやうの宅地たくちなりとぞ」と記載したうえで、新古今の歌を引用しています。

千載集えらびはべりける時、ふるき人々の歌を見  
て 皇太后宮大夫俊成

行末は我をもしのぶ人やららん

むかしを思ふ心ならひに

新古今和歌集卷第十八・雑歌下・一八四五

『拾遺都名所図会』巻一には、この記載を補う形で、俊成卿しゅんせい社の鳥瞰図きやくんずが載っていますので、江戸時代の様子と比較するために、引用しましょう。この図では、たしかに、人家じんかのうしろにあります。現在、表通りの烏丸通に面して、むきだしになっています。『拾遺都名所図会』に描かれている人物の大きさから判



俊成社の社殿



『拾遺都名所図会』巻之一 俊成卿社の図。  
 (国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用)

断すると、社の大きさは、現在の俊成社と同程度です。

## 俊成と忠度

『平家物語』巻第七に、平忠度が、五条の三位俊成の卿の宿所を訪ねて、自分の歌の勅撰集への採録を嘆願して去つてゆく場面があります。もうほとんど死語となつていますが、無賃乗車のことを薩摩守さつまのかみといひます。失礼な話ですが、その薩摩守忠度たつのりです。

薩摩守、兜の緒をしめ、馬の腹帯をかため、うち乗つて、西をさして歩ませ行く。三位はるばると見送りて立たれたるところに、薩摩守の声とおぼしくて、「前途ほど遠し、思ひを雁山の夕の雲に馳す」と高らかにうち詠じ給へば、三位これを聞いて、涙をおさへて入り給ふ。げにも、世しずまつて、勅撰あり。『千載集』これなり。その中に忠度の歌一首いれられたり。「こころざし切なりしかば、あまとも入ればや」と思はれけれども、勅撰の人なれば、名字はあらはさず「読人知らず」と入れられる。

平家琵琶にのせて語れば、さぞかし名調子でしょう。俊成は、この約束を守り、よみ人しらずとしてですが、次の一首を採用しています。

故郷花といへる心をよみ侍ける

よみ人しらず

さざ波やしがの都はあれにしを

昔ながらの山ざくらかな

## 千載和歌集巻第一・春歌上・六六

引用した平家物語に、「前途ほど遠し」云々とありますが、これは、『和漢朗詠集』の六三二番にある江相公（大江朝綱）の渤海使の送るときの名句です。対句になっている後半が略されていますが、『源平盛衰記』には後半も引用されていますので、引用しておきましょう。

江相公

前途程遠シ  
 後会期遙カナリ  
 馳ス思モ於ラ雁山ガンザン之暮雲ユフクベノクモ  
 霑ツル纓スズナ於ラ鴻臚コウロ之晚淚アカツキノナミダ

和漢朗詠集・六三二

後半の「纓を鴻臚」云々の「纓（冠の紐）」を、さりげなく「兜の緒」と対にして効果をあげています。

このあたりは絵になる名場面ですので、繰り返して取り上げられています。能の『俊成忠度』では、シテの忠度の霊があらわれて、「さても千載集に一首の歌を入れさせ給ふ御志は嬉しけれども読人知らずと書かれし事心にかかり候。」と嘆き、ツレの俊成が応えて、「尤もそれはさる事なれども、朝敵の御名を顕さんは世の憚りなり。よしやこの歌あるならば、御名は隠れよもあらし。御心やすく思召せ」と慰める場面があります。この小さなお社に、これだけの由緒があるのは、京都ならではということになります。

## 漢字資料館

日本漢字能力検定協会が漢字文化の情報拠点を目差して、二〇〇〇年（平成十二年）に開設した資料館で、烏丸通松原下ル西側にあります。漢字に関するいろいろな展示をおこなっています。中でも「西安碑林博物館」の拓本の展示がおもしろい。行書の手本として有名な王羲之の「三蔵聖教序碑」の拓本などが展示されています。わたしも、一度、西安の碑林博物館を訪ねたことがあります。現地では、重刻した碑を拓本にして、冊子として販売していました。漢字資料館では、瓦当（軒丸瓦の先端の模様）の拓本を体験するコーナーがあります。

## なつかしきチンチン電車

烏丸万寿寺西北の隅にある北阪ビルの中に、懐かしいチンチン電車が保存されています。掲載した写真は、ガラス越しで、天気がよかったので、まわりの風景が写りこんでいて、わかりにくいのですが、よくみると行先表示が「北野」になっていることがわかります。

かつては、京都駅から、西洞院通、四条通、堀川通、北野商店街を通って、北野天満宮まで走っていました。わたしも子供の頃、京都を訪ねた折に、一度乗ったことがあります。狭軌のうえに車台が一つなので、前後の揺れ（ピッチング）が激しかったのを覚えています。ちなみに、梅小路公園では、チンチン電車の動態保存をしています。ここでは、蒸気機関車の動態保存もして



チンチン電車の静態保存

いますので、一度訪ねる価値があります。

## 安政の大火

チンチン電車のあった烏丸万寿寺の十字路から、西に室町まで戻ると、町名看板「萬壽寺通室町東入御供石町」②があります。町名の中の御供石とは、御供（ごく）とも。神様への供え物）をささげるための石の台のこと。祇園祭の際、この町内から、御旅所に御供をささげたと伝えられています。

京都の大火については、本シリーズの第1回にのべましたが、このほかにも大火に見舞われています。実は、町名看板②のある御供石町は、一八五八年（安政五年）に、大火の火元になっています。この大火について、江戸時代のかわら版の『京都大火極



萬壽寺通 室町東入 御供石町 ②

本しらべ』には、次のように記載されています（句読点付と振りがなは現代遣りがな）。

六月四日午の中刻、下諏訪丁万寿寺西側ろうじより出火。折節、西北風つよく東南へ火移り、東八柳馬場南側より東六条へとび火いたし、室町まで。七ツころより風かハリ、東北風に相成、西八新町通り松原より、南八七条迄。室町は万寿寺上ル処より七条まで。烏丸、右同断。東洞院、松原通り下ル処より七条迄の間の町。高倉、右同断。下寺町南側、寺々不残焼失。夫より七条新地土手丁、上之口辺。東六条御境内不残御類焼。枳穀御殿、東八高瀬川辺まで。遊行寺も焼失仕候。漸四日夜戌の刻二、火鎮り申候。六月五日朝仕便。

小野秀雄コレクション（東京大学大学院情報学環・学際情報学部）『京都大火極本しらべ』（火事 No. 54）

火元の「下諏訪丁万寿寺西側」は、基準の十字路の取り方が違うだけで、町名看板②とほぼ同じ場所です。文中、「東六条」とは、東本願寺のこと。「枳穀御殿」は、枳穀邸（涉成園）のこと。

「遊行寺」は、正式には金光寺といい、七条道場とも呼ばれた時宗の寺。当時は七条通の南側（枳穀邸の南方）にありましたが、今はありません。

町名看板②があるところから、万寿寺通を東に歩くと、同じ御供石町の町内に、「日本語語源研究会」の看板が目につきます。インターネットで検索しますと、関連学会として「京都地名研究会」(<http://chimei.hp.infoseek.co.jp/>)にたどり着きました。このシリーズでは、仁丹の町名看板に書いてある町名の由来を云々していますので、まんざら関係がないとはいえませぬ。京都を歩き回ると、不思議なくらいに、いろいろにつながりができます。



#### プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (<http://xyntex.com>) を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第5回）2007/12/26  
 © 2007 藤田眞作 <http://xyntex.com>